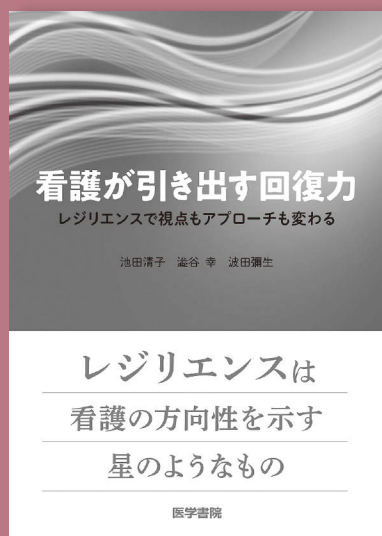


書評

看護が引き出す回復力

レジリエンスで視点もアプローチも変わる



- 著 池田清子／澁谷幸／波田彌生／丹生淳子／八木哉子／山尾美希
- 定価 2640 円（本体 2400 円＋税）
- 判型 A5
- 頁数 128
- 発行 医学書院

評者

日本赤十字看護大学 名誉教授／
健和会臨床看護学研究所 所長

川嶋みどり

看護の視点から多面的に
レジリエンスを捉えた書

人生の途上で誰もが会える困難はさまざまであろうが、人は逆境に立った時どのようにして立ち直るのであるか。わがこととして考えても、最終的には自分の力で乗り越えた感が強い。

本書は、この自ら立ち直る力を、看護の視点から個人、家族、地域、組織などにフォーカスを当て、その概念をそれぞれの局面にどのように活かせるかを述べている。文献や討論を通じて、レジリエンスを「その人がもつ力であり、逆境やストレスに対して環境と相互作用しながら、柔軟に対応するプロセスであり、その結果の状態をあらわすもの」と定義した上で、「病気は回復過程」であるとのナイチンゲールの言葉を連ね、看護の立場からのレジリエンスの考え方をいっそう深化させている。

看護における現実の逆境に
立ち向かうに当たって

東日本大震災以来、被災により家族や暮らしを喪失した人々の回復に向かう態様の多様性を想起すれば、そこには、本書で示された看護におけるレジリエンスの5つのキーワードがちりばめられている。ただ、復興の基盤ともなる地域（コミュニティ）の自助力は、頭で考えるほど容易ではなく、10年の歳月を経てなお回復途上である。それゆえに、本書の「災害からとらえる地域のレジリエンス」の要因を個々の地域特性に重ねて、その差異と過不足を検証する課題を与えられた思いがした。

今、まさに地球規模で進行中のパンデミックは、多くの人々の命を奪い生活基盤を脅かす大きな逆境であり、社会、経済、文化面への影響も著しい。感染症を想定したわが国の医療体制のもろさが可視化されもした。看護師らも先の見通しが立たず達成感の得られにくいことから、アイデンティティが揺らぎ、レジリ

エンス力を脅かされかねない状態にあり、離退職者が後を断たず看護の危機的状況を生んでいる。

そうした中、仮説的な対応策の1つではあるが、看護独自のアプローチによりCOVID-19患者を重症化させず、症状緩和を図ることができれば、看護の力への確信を持つことができるはずである。すなわち、ワクチンや治療薬と並んで重要な、宿主の免疫、回復力を高めるケアの有用性を、看護師の過去の経験知に重ねて実践、実証するのである。

看護本来の機能を維持するために

ところが実際には、「よいと分かっても実践できない職場風土」がネックになって「実践したいけれどできない」状況を生んでいる。それは必ずしもCOVID-19由来だけではなく、それ以前からの風潮でもあった。それゆえに、組織のレジリエンスに関する記述は極めて時宜を得たものと受けとめた。

「看護本来の機能を維持する」という意味でのレジリエンスが組織とリーダーたちに求められている。示されたレジリエンスの高い組織の特徴の中でも、「余力」と「危機や変化への準備性」は、緊急事態等を想定すれば必須項目であり、これらを組み入れつつ更新を重ねれば、少々の異変にはたじろがない組織基盤に通じるのではないかと。項目に沿って、自己の組織のレジリエンス診断を行ってみてはどうであろう。

背景を異にした看護職者らの討論のプロセスと蓄積をまとめた本書は、看護師なら誰もが経験する場面や事柄、疑問に感じることなどが豊富に取り上げられている。ぜひ一読をお勧めしたい。